
ハルカゼ

森 翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルカゼ

【Nコード】

N1479F

【作者名】

森 翼

【あらすじ】

精霊力という不思議な力を持つ少年ハゼ。彼は父と兄の意志を受け継ぎ悪い国政を潰すべく今旅立つ。

プロローグ（前書き）

こんにちは。作者です。つまらない文章ですがよろしくお願いします。

ブローグ

「ついに、この日が来たぜ。」

そういつて欠伸の一つをかましたこの少年はハゼという。短い髪をつんつん立てた明るい少年である。

必死に働いて貯めた金でついに車を買ったのだ。

二人くらいしか乗れないちゃっちゃいものだがハゼは大満足。なぜなら今日から旅に出ようとしているからだ。

「おい、ダン、車届いたぞー。」

「わかった。今そっちに行くね。」

そういつて小さなアパートからでてきたのはダンと呼ばれた弱々しい感じの少年だった。

手にはたくさんの荷物が抱えられている。

「荷物はこれでいいよね？」

「肉さえありやなんでもいいぜー。」

「そうだね。」

そして車は二人を乗せて町を抜けて行つた。

ハゼの目的（前書き）

こんにちは。作者です。アドバイスなどありましたら参考にしたいのでお願いします

ハゼの目的

「あー暇だあー。」

町の市場を歩くハゼがつまらなそうに呻く。

この世界は十の都市に分かれていて中心部にある国王城によって治められているドラゴンフィールドという国である。

国政がとても悪く国民は苦しい思いをしているが、反乱はなかなか起きない。

なぜなら軍隊が強力だからである。

大将と呼ばれる三人が国王城に、中将五人が国中に、そして少将が十人各都市にて警備しているのである。

それらの力が強力であるがために反乱しづらいたのであった。

そんな中、反乱を起こす連中もいて、ハゼの父や兄もそのうちの一人であった。

しかし、どちらも失敗に終わり、その意志を引き継いだハゼが親友の剣豪ダンを連れて旅にでたのだった。

といってもダンはただの修業ぐらいにしか思っていないのが実際のところである。

そして今、ハゼは最南端の都市であるサウスクラウンにいる。

なぜなら、ハゼはサウスクラウンの町の出身だからである。

ハゼの父は元々はこの町の農家だった。しかし、サウスクラウンの中では、農家に対する圧力が非常に強かったために、ハゼは幼少期には、貧しい生活を強いられることになった。

「ところでハゼ、暇ならあの可愛い女の子を助けてあげれば？」

そついわれ前を見ると、小学生くらいの女の子が、3人の男に囲まれていた。

女の子は恐怖感のあまりに動けずにいた。

ハゼには貧しい生活の中で得た能力があった。

「風のやいば!!!」

そういつて手を横に振り下ろすと、一陣の風が男達の体を切り刻んだ。

「なっ、なんなんだおまえは!？」

それは『精霊力』という能力だった。

「おい、引き揚げるぞ。」

男達はあまりの凄さに恐怖し逃げていった。

「助けてくれてありがとうございました。」

「おう、怪我なくてよかったな。」

「おかげさまで。」

「これからは気をつけてね。」

「じゃあなー。」

「ありがとうございました。」女の子は早足に市場へと去って行った。

ハゼは双子の精霊に出会い二つの精霊力を授かった。

それは風を操る力と磁力を操る力である。

普通の人間は二つの精霊力を得ることは体が耐え切れずに身を滅ぼすことになるのだが、ハゼの場合は持つて生まれた身体能力と、過度のトレーニングによりそれを可能にしたのだ。

全ては現国王アークヒルズを倒すためである。

ハゼの目的（後書き）

これから戦闘も増えてきます

1話 ニリュ編 崩壊への誘い（いざない）

ハゼはサウスクラウンの南東部を車で走っていた。
運転はダンがしている。

ダンいわくハゼが運転すると、車が大破するかららしい。

1時間ほどすると少数ながらテントが見えてきた。

側によってみると小さなベースキャンプだった。

「中に行ってみようぜ。」

「そうしようか。」

二人の意見は合致して、立ち寄ってみることにした。

まず最初に目に入ったのは神秘的なオーラを発する女性だった。

ダンは特別なにかを感じたわけではなかったが、ハゼはこの女性になにかの力を感じた。

しかし、ハゼはそんなことは頭の片隅に置き忘れて気さくに女性に話しかけた。

「よお、ここはなんの集落なんだ？」

すると、女性はいこりと微笑みながら、

「ふふっ、こんにちは。ここはあそこに見えるサウスクラウン遺跡の研究拠点なのよ。私はニリュよ。よろしくね」

「おうっ、よろしく！！俺はハゼだっ」

「ダンです」

「せっかくですから明日一緒に遺跡の探検に行きましょうよ」

その一言により、ハゼとダンは遺跡の探検に行ってみることにした。

翌朝、ニリュに迎えに來られて外にでると、ハゼの車は見事に破壊されていた。車体は完全に再起不能状態であった。

「誰が…誰がこんなことをしたんだっ！！」

「さすがに僕もこれは許せないかなあ」

「あつ、車なら一緒に乗っていきますか？」

「ああ、そうするよ。でもこの先どうしよう」

「まあ、とりあえず遺跡に行ってから考えよう、ね、ハゼ」

それに対しハゼはてダンにこっそり耳打ちした。

「遺跡にはなんかあるぞ、戦闘準備しておけよ」

「わかった頑張るよ」

こうしてハゼとダンはサウスクラウン遺跡に向かうことになった。

はたしてこの遺跡には何かがあるのか？その真偽を確かめるべくハゼは車に乗り込んだ。

ニリュがその時かすかに悲しそうな顔したのに気付いたのは、ダンだけだった。

1話 ニリユ編 崩壊への誘い（いざない）（後書き）

>人物紹介<ハゼ…役割リーダー。このチームを創設したリーダー。
高い戦闘能力と操風・磁界という二つの精霊力を軸に戦う。決断は
早い。思考はやや弱い。

ニリュ編 裏切り

ハゼとダンは車に乗ってニリュの運転のもとサウスクラウン遺跡に向かった。

遺跡に向かう時、建物は全くなかった。

「なんでこんなにも何もないんだ？」

「たしかに不思議だよね」

「それはサウスクラウン神の呪いのせいよ」

「なんだ、呪いって？」

するとニリュはサウスクラウンの歴史について語りだした。

「サウスクラウンにはその昔守り神がいたの。しかしある事件が起きてその守り神が殺されてしまったの。その際にサウスクラウン神殿を守っていた加護がなくなってこの近辺では木が腐るのが以上に早くなってしまったのです」

「へえー、よくわかんねえーけど大変なんだな」

「あつーもうそろそろ着くみたい」

「ではここで降りて下さい」

そう言われて降りてサウスクラウン神殿へと歩いていった。

しかし中に入った途端に国王軍と書かれた軍服を着た兵隊に囲まれた。

「手を挙げる、今から貴様達はサウスクラウン神殿基地の奴隷となつてもらふ」

「はあー？なるわけないだろ」

「まあハゼ落ち着け、国王軍さん断るとどうなりますか？」
すると神殿の奥から声がした。

「その場合は死刑だな」

現れたのは少将ノズルだった。ハゼは目を吊り上げた。

「こんな早く会えるとは思ってなかったぜ。少将ならば…ぶっ飛ばす」

「ふっ、笑わせるノズベル行け」

「わかりました」

そう返事が聞こえた後、ハゼとダンは二リュにハンマーで後頭部を強打された。

「そういつつもりでここに連れてきたのか…」

ハゼの意識はそこで途絶えた。

二リユ編 裏切り（後書き）

久しぶりの投稿です

ニリュ編娘

ハゼは薄暗い牢屋に閉じ込められていた。目を開けると薄い光がハゼの身体を包んでいた。そして、その隣にはニリュがいた。

「てめえ、よくも騙したな」

「静かに」

怒ろうとした瞬間ニリュに制止される。

「あなたは明日死刑という立場にあります。そこで、提案があります」

一呼吸おいてニリュはこう告げた。

「脱獄したいですか？」

ハゼはどうしたらいいかを思索した。しかし、まだハゼには怒りが残っていて、冷静にはなれていなかった。

「まず一つ聞くが、おまえノズベールって呼ばれていたが、それはなんだ？」

「それは私の本名です。あの少将ノズールが、そう、私の父がつけた忌ま忌ましい名前です」

「じゃあ俺を騙したって事だな、だったら容赦しないぞ」

「待って下さい。実は私はあなたに頼みがあります」

「・・・」

「父ノズールを倒して下さい」

その言葉にハゼは驚愕した。

「どういう事だ？」

「父は今、サウスクラウン神殿において、ひそかにある作戦をたてています。それは近隣都市侵略作戦です」

「なんだそれは？」

「隣のアトラスという町を占領しようとしているのです」

少しの静寂があたりを包む。

続けてニリュ改めノズベールが話を切り出す。

「ダンはノズールの近くに捕まっています。早く助けないと」

「ああ、全部倒せばいいんだろ」

そしてハゼとニリュは牢屋を駆け出した。

道中向かってくる敵は風の力で倒した。

しばらくして元の場所、ようするに入口へ戻ってきた。そこではダンとノズールが戦っていた。ノズールは部下5人とともにダンを攻撃して、そして、たった今ダンはノズールの目の前で倒れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1479f/>

ハルカゼ

2010年10月14日16時34分発行